

金子文庫蔵『自讃歌注』寸見

藤川功和

はじめに

故金子金治郎氏が生前収集された多くの写本類は、現在金子文庫として広島大学附属中央図書館貴重書庫に一括して収蔵されている。その中に、『自讃歌』の古注釈がある。この古注釈は、黒川昌享、王淑英氏が『自讃歌古注十種集成』（桜楓社・昭62。以下、『集成』と略す）の中で翻刻された広島大学国文学研究室蔵本某注（以下、広大本と称する）と同系統の伝本の一種である。

『集成』底本書誌（黒川昌享氏）によると、当該注は、金子文庫蔵本を含めて、二類三本の存在が知られる。『集成』の中では、一類Aとして、広大本、二類Bとして、岐阜市立図書館蔵本（以下、岐阜本と称する）、二類Cとして本稿で取りあげる金子文庫蔵本（以下、金子本と称する）が紹介されている。

先述した底本書誌に「広大本と岐阜市立図書館本とはほぼ同文の奥書を持つが、本文自体はかなりな相違を示している。（一類と二類

の相違は、注全体が異なるもの三十九例にのぼる。」とあるが、金子本と広大本についても同様な傾向にある。また、同じ二類本である岐阜本と比しても、本文の異同が少なくない。『集成』の中では、広大本と岐阜本の校異が頭注に示され、金子本については、部分的に校合が加えられているに過ぎない。

そこで、本稿では、『集成』の校異を参考にしつつ、金子本と、広大本、岐阜本とで、特に大きな異同の見られる箇所を摘出し、金子本の本文上の特徴を指摘することを目指す。なお、金子本の翻刻並びに広大本全体との校異については、『内海文化研究紀要』第31号（平15・3刊行予定）を参照されたい。

一 金子本冒頭部及び奥書

金子本と他の二本とを比較して、「天のしたのとかにてなみのおとしつかかりし御代は」で始まる『自讃歌』の仮名序が金子本には全くみられない点と、他の二本にほぼ同文として存する巻末の書写奥書が、やはり金子本にはみられない点が、大きな相違点としてあげられる。

（資料1）金子本奥書

右宗祇新注也穴貫、みまろしんじゆなり、かしこく、かくしく、

寛永拾三曆、かんえんじゅうさんりやく

子、こ、五月下旬写之也、けしごんこれちうすなひ

奥書については、広大本には「天文貳年（一五三三）（一） 十月吉日書畢」とあるのに対して（岐阜本にはこの部分ナシ）、金子本は、（資料1）に示した如く、寛永十三年（一六三六）書写であることが知られる。また、金子本では、当該注を宗祇注と位置づけている点が注意される。

二 金子本所収和歌について

金子本所載和歌の総数は、基本的には岐阜本と同数の百七十首である。『集成』が指摘する如く、広大本は、慈円歌「いつまてか涙くもらて月は見し秋待えても秋そこひしき」（31）と、藤原秀能歌「もしほやく海士の磯辺の夕煙立名もくるし思ひたえなて」（157）（本文、歌番号共に『集成』に拠る）とが、詞書、和歌本文、注共に欠文となっている。

また、金子本においては、式子内親王歌の二首「忘れてはうちなけかるゝ夕へかなわれのみしりてすくる月日を」（「ゆめにてもみゆらん物ヲなげきつゝうちぬるよひの袖のけしきに」）は、和歌本文が、上欄や行間に補記されているだけで、他の二本にみられるような詞書及び注本文が全く存しない。

さらに、三一帖表（良経の「めぐりあはむ」歌）の上欄には、「忘れしとちきりて出しおもかけはみゆらん物□ふる里の月」と、当該注二五帖裏に既出の、『新古今和歌集』（巻第十・旅歌・94）所収良経歌が補記されている。

そこで、『集成』所載の古注に目を向けると、木戸孝範（二）注『自讀歌之注』が、良経歌「遠あはん」【27】、「忘しと」【29】【（一）】は、孝範注の歌番号を示すを、他の古注とは前後して掲出している。「めぐりあはむ」歌注上欄への「忘れしと」歌の補記は、他の古注との校異を示すものと考えられよう。この他、和歌本文についても、他の二本との間で存する異同が少なくない。

三 金子本の独自注

細かな異同を別にすれば、他の二本には全くみられない注が二例存し、それらはいずれも西行歌に対する注である。（資料2）（資料4）に全文を示す。但し、底本に付されているルビは省略した。

（資料2）金子本・「あわれいかに」歌（一〇六オ―一〇六ウ）

名所秋

あわれいかに草葉の露のこぼらん

秋風立ぬみやきのゝはら

面のごとし西行みちのくまでしゆ

きやうせし人なり秋風立ぬみやき

野あわれなるおりふし古郷の事を

おもひやりてあさじうか庭にいかに

露こぼらんとなり

（資料3）兼載注・「あわれいかに」歌（本文は『集成』以下同じ）

○秋のうたの中によみける

衰いかに草葉の露のこほらん秋風たちぬ宮城野の原

或説にいはいく、故郷にて宮城のを初秋の比思ひやりてよめるといへり、又西行みちのくにまて修行せし人也、秋風たちぬとは宮城の、初秋の比す、しき風吹てあはれなる折ふし古郷

の事を思ひやりて、あさちか庭に衰いかに露こほらんと思ひやる哥といへる、是やよろしからん、

(資料4) 金子本・「津の国の」歌(二〇七才)

江寒蘆

津の国の難波の春は夢なれや

あしのかれ葉に風わたるなり

面のことし彼所を春見て又ふゆみ

たる妹なりくわんねんしたる心なり

難波とはいつかたもといふ心なりそれ

を名所にいひなさは津の国と

をけり

(資料5) 兼載注・「津の国の」歌

○冬の歌とよめる

つこのくにのなにはの春は夢なれやあしの枯葉に風渡る也

なにはといふこゝにては何事もといふ心也、それを名所にい

ひなせば津の国とをけり、しかもなにはにてあしのかれはの

風をきつて、さしも春おもしろかる名所なれともかくもなり

けるよと、くわんしたる心也。

金子本の当該歌注に関しては、『集成』所収の古注をみる限り、いずれも(資料3)(資料5)に示した如く、兼載注との一致が認められる。傍線の番号が金子本と兼載注とで対応している。

四 むすびにかえて

以上、金子本について、他の二本との大きな異同を中心に概観してみた。『集成』底本書誌の分類のように、金子本は、大きくは岐阜本と同類とみなすことが出来よう。しかしながら、本稿で指摘したように、他の二本に存する、序の部分や「此御本自前」の奥書が、全くみられない点、他の二本には、殆ど注されていない歌に関して、兼載注に依拠した注がみえる点など、相違も少なくないのである。中世から近世にかけての『自讃歌注』の享受のあり様を考える上で、今後更に検討を加えたい。

※傍線は私に付した。

[注]

(1) 位藤邦生・藤川功和翻刻・解題。

(2) 『集成』解説によると、木戸孝範(一四三四〜一五〇二頃)

は、関東管領上杉氏の重臣で、冷泉持為に和歌を学んだ。

——ふじかわ・よしかず、広島大学大学院教務補佐員——